

2026年4月29日(水)

老球の細道920

4月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今年もなんとか鶴ヶ城の桜見を達成できた。孫たちと天守閣に昇ることはできなかったが、城内を歩くことができただけで御の字である。家の庭には亡き父が植えたツツジの淡いピンクと白い花が叱咤激励する。術後3か月、室井流「3の法則」(3日で慣れる。3週間で習慣化。3か月で成果。3年でプロ)からすると、そろそろ回復の成果が出てくる頃か。

1・読書から

◆「いつか咲かせられると期待するから今日があるような気がするんですよ。そこは自惚れていいと思うんですよ。そのために努力しなきゃいけない、だから頑張っちゃうんじゃないかな」〈辺見庸著『屈せざる者ら』朝日新聞社〉：屈しない気持ちを思い出すために読んだ本の中に女優左幸子のこの言葉があった。残された時間を意識して今日を生きる。

◆「むずかしいことに対しては、まだやさしいうちに処理し、大きなことに対しては、まだ小さなうちに処理せよ。天下の難事は必ず、やさしいことの中にはじめがあり、天下の大事は必ず、小さなことの中にはじめがある」〈アンドルー・ワイル著『人はなぜ治るのか』日本教文社〉：何事も初めの一歩が大切。初めに会う簡単なこと、小さなことをおろそかにすると病気でもバスケットでも自分自身の願わざる結果を招くことになる。

◆「いやしくも自ら新たにせんとするものは、昨日の自己にこびてはならぬものである」〈幸田露伴著『努力論』岩波文庫〉：同じことをこつこつ続けることが努力ではない。さらに高みを目指し、努力していることなど忘れて一心不乱に取り組むことが努力の醍醐味である。

◆「重大な試練に立ち向かわなければならないときに、本当の困難は、毎日毎日、毎月毎月およそ残酷な不確かさに耐え抜くということである。忍耐強さとは、勇気の別名である」〈フランチェスコ・アルペローニ著『他人をほめる人 けなす人』草思社〉：今私が置かれている心境である。バスケットでは、負けても負けても、もう一息、もう一息と立ち上がること。

2・新聞から

◆「軍人の誇りとするものは必ず小児の玩具に似ている」〈朝日：折々のことば：芥川龍之介『侏儒の言葉』〉：最近よく見る軍人が胸に飾る勲章も子どものバッジやワッペンと同じ。

◆「『最近の若者は』と言ってしまいそうになったら、まずは『ホウレンソウのおひたし』を思い浮かべてみることにしよう」〈朝日：多事奏論：岡崎明子〉：新採用教員の頃よく言われたのは「ほうれんそう(報告・連絡・相談)」。最近の若者は「ちんげんさい(沈黙する。限界まで言わない。最後まで我慢)」だという。そして管理職の心得には「おひたし(怒らない。否定しない。助ける。指示する)」だそうである。最近も昔も変わらないと思う。

◆「本人が豊かじゃないと、豊かなものはこぼれ出てこない。ただその方法論はないわけで。願うしかないのですね。豊かな自分になりたい、と」〈朝日：語る：水谷豊〉：人間が豊かでホンモノでなければ良い作品はできない。名前だけ「豊」でもだめ。願えばかなえられる。